

保育士養成課程の「食と発達」の授業における学習特性と課題

Study on Nursery Teachers Course Curriculum for
Dietary Education to Children辻 ひろみ
Hiromi TSUJI名倉 秀子
Hideko NAGURA

要 旨

【目的】「食と発達」の授業における教育目標を達成するために、授業回ごとの「授業振り返りシート」により、学習テーマと教材の妥当性の判断、学生の学習特性の把握を目的とした。

【方法】対象は、本学幼児教育学科に在籍し、「食と発達」を履修した137人のうち、研究趣旨を理解し、研究協力に同意を得た者122人とした（有効回答率90%）。

授業評価は、15回のうち第1回～第14回に行い、学生により「授業振り返りシート」を記入後、回収した。「授業振り返りシート」の評価項目は、「理解」「発見」「楽しさ」「参加」「満足」に対する4点順位尺度の選択肢を用い、得点化を行った。

【結果】「子どもを取り巻く食生活の現状」の学習テーマは、「参加」「楽しさ」「理解」「発見」の得点が高く、栄養や身体機能の基礎知識では、「理解」「発見」が低かった。

教材では、「お弁当料理カード」は、「参加」「楽しさ」が高く、写真などの静止画像によるスライドでは、「参加」「楽しさ」「発見」が低くなった。

学生の学習特性は、関心喚起の度合いと主体的な発見を軸に3つのグループに分けられた。

以上のことから、講義や演習など授業形態の組み合わせや教材の研究は、学生の学習特性に合わせ考えることが必要となった。

授業評価項目は、「参加」「楽しさ」「理解」「発見」により授業回ごとに確認することで学習プロセスを把握できるが、「満足」は、授業の学びのプロセスを把握するには問題点が残る、評価項目の検討が必要であることが示唆された。

I. はじめに

保育所保育指針の改定・見直しに基づき、保育の現場では期待された業務を担う人材作りが要請されている。これを受けて、保育士養成課程においては、平成22年3月保育士養成課程教育要領¹⁾が改訂され、教科目、単位数、実習に関する内容が改正された。「小児栄養」では「子どもの食と栄養」と教科目の名称が変更され、目標が示された。その目標は、1) 健康な生活の基本としての食生活の意義や栄養に関する基本的知識を学ぶ、2) 子どもの発育・発達と食生活の関連について理解を深める、3) 食育の基本とその内容及び食育のための環境を、地域社会・文化とのかかわりの中で理解する、4) 家庭や児童福祉施設における食生活の現状と課題について学ぶ、5) 特別な配慮を要する子どもの食と栄養について理解する、とある。これらは実社会で健康に生活するために、保育士自身が食生活に関する知識・意識や食生活の自立能力があることを前提にした保育の専門教育の科目内容であることはいままでのない。

保育指針にある「教育と養護の一体的に行う保育の特性」から、保育士は食生活面において、子どもの健康・安全な生活への配慮だけでなく、日々対面する子どもの育ちを支援するために、保育計画の立案、実施、評価プロセスを効果的に活用するスキルを身につけておくことが求められている。

保育士に求められている食に関する実践能力育成については、次の4つの問題点が指摘されている²⁾。1) 所属の保育士養成課程の学生の食生活調査では望ましい食生活とはほど遠く、食の大切さを理解して食べていない。2) 現場の保育士が必要と考える栄養の基礎知識、調乳技術や離乳食の実践的理解、食育活動で必要とする栽培活動の知識、調理の知識や技術などについては、養成側と保育士では重要と思う内容は異なる。3) 保育

における食育に対する指針には、不明確な部分が多く、食育の具体的な考え方等明確になっている部分が3歳以上児に多くみられる。4) 保育現場における食育の実践内容は、その内容や実施方法が保育士の捉え方に大きく影響される。

また、保育士養成課程の学生の食生活の実態調査³⁾、食育実践などの実践事例⁴⁾から、保育士をめざす学生には、健康な食生活の理解、自らの食生活を改善する能力、適切な食生活が実行できる専門職としての基礎能力が求められている。子どもの健康管理、食生活および食育は、保育の専門業務に含まれる。合わせて保育士自身が健康で、食の自立能力を身につけていることは、将来、子どもや保護者の手本となる保育士の基本スキルである。そのため、学習の基盤には自分自身の食生活があり、学生のうちから自分の健康や食生活に興味を持つことが大切である。

保育士養成の教員は、「子どもの食と栄養」の教育指導計画の立案、その実施、評価が必要となり、学生の学習特性に沿った教育教材とその教育的効果の把握を検討し、授業に反映することが必要である。

本研究は、「食と発達」の授業の現状と課題を明らかにするために、平成23年度の授業の学習テーマと教材の妥当性、学生の学習特性を捉えることを目的とした。

II. 方法

1. 対象

対象は、十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科に在籍し、平成23年4月～7月に至る期間に開講された「食と発達」（保育士養成課程においては「子どもの食と栄養」の名称が提示されている）を履修した3年生137人のうち、研究趣旨を理解し、研究協力に同意を得た者122人を対象とした（有効回答率90%）。

2. 授業の概要

授業の概要を表1に示した。

「食と発達」の授業では、保育士養成課程に示された学習内容を考慮した学習テーマと目標を設定し、全15回実施した。1コマの時間配分は、講義と演習を組み合わせて行う場合、30～45分を講義、残りの時間を演習に充てた。教科書は、筆者らが執筆した「子育て－子育てを支援する－子どもの食と栄養」（榊原文書林発行）であり、内容は保育士養成課程の内容に準ずる項目で構成されている。教科書に加えてビデオなど視聴覚教材や、体験により学ぶためのワークシート型のプリント、市販の料理カード、保育所給食の写真も使用した。

教育指導計画立案では、保育士養成課程と教科書を事前に確認し、教科書の章だてに沿って授業内容を14回に分け、15回目には総合的なまとめを行う形にした。演習は15回の授業の内、第1,2,3,7,8,9,12,14,15回の計9回取り入れ、第5,6,10回は1回20分のビデオの視聴とした。教科書のみで解説を実施したのは、第4回と第11回であった。

3. 授業評価の実施方法

それぞれの授業時に行う経過評価の授業評価は、第1回～第14回に実施した。実施方法は、毎回授業開始時に学生に「授業振り返りシート」を配布し、授業終了時に回収した。

「授業振り返りシート」には、授業評価の他に授業の質問や要望などを記入する欄を設けた。また、授業最終回には、「やる気を高めた内容」と「やる気が低下した内容」を自由に記述したものを回収した。「授業振り返りシート」は、授業の質問等に回答を書くなど対応したうえで、次の授業開始時に返却した。

授業振り返りシートの評価項目は、「参加できた」「楽しかった」「内容は理解できた」「発見があった」「満足した」の5項目（以下「参加」「楽しさ」「理解」「発見」「満足」と省略表記）とし、回答は「4.たいへんそう思う」「3.ややそう思う」「2.あまりそう思わない」「1.全くそう思わない」の4点尺度による選択肢を用い、得点化を行った。

また、「発見があったこと」や、「授業改善策の提案」など、学生の生の声を自由記述できるよう記入欄を設けた。

4. 倫理面の配慮

倫理面の配慮として、この評価シート記入の内容や目的は授業の第1回に研究概要を説明し、学習状況把握に使用するが、一切成績に関与するものではなく、学習者に合わせた授業展開と保育士養成における食の授業研究を目的に行うものであることを口頭で説明した。また、授業最終回の時点で再度授業研究に用いることを説明し、データは個人でなく集団としてデータを処理し、個人を特定することはないこと、結果を外部公開する可能性があることなど説明した。その際、授業研究に協力意思のある者のみ同意書の記入・提出があり、同意書が提出された者のデータのみを本研究対象者とした。

5. 統計解析

授業回別授業振り返りシートによる授業評価結果の統計解析は、SPSS Statistics ver.17を用いた。授業回における要因の水準間の平均値の差検定は、一元配置分散分析により行い、有意水準は $P<0.05$ とした。また、授業内容に対する学習特性の分析は、主成分分析を用いた。

Ⅲ. 結果

1. 授業振り返りシートによる評価

授業の概要および授業振り返りシートによる評価の平均点を表1に示す。

「参加」は授業回別の得点が、第1回で3.7点と最も高いが、第3, 4, 8回は、3.4点と低く、第13回では最低の3.3点であった。14回の授業回の得点の間に差がみられるか検討するため、一元配置分散分析を行った結果、有意な差が認められた。

「楽しさ」における授業回別得点は、第1回が3.7点と最も高く、次いで第12回が3.6点であった。また第3, 4, 5, 7, 14回では3.3点と低かった。第8回は最も低く3.2点であった。14回の授業回

表 1 授業の概要および授業振り返りシートによる評価の平均点

授業 回数 教	授業形態			教材		評価の平均得点					
	学習テーマ	講義	演習	教科書	教科書以外	演習の詳細、 教材の詳細	参加*	楽しさ*	理解*	発見*	満足 ^{n.s.}
1	子どもを取り巻く食生活の現状を知る	○	○	○	○	造語である複数の「コト食」をインターネットで調べて発表する。	3.7	3.7	3.5	3.4	3.7
2	子どもの成長・発達・発育の特徴	○	○	○	○	1)前日の食事内容を食事記録用紙に記入し仲間 の食生活をみる。 2)成長曲線用紙に事例の子どものデータを記録する。	3.5	3.4	3.3	3.3	3.5
3	栄養素が消化・吸収・排泄されるプロセス	○	○	○	○	「消化・吸収・代謝・排泄」など栄養を学ぶ際の言葉の意味を調べ用語記入用紙に記入する。	3.4	3.3	3.2	3.3	3.5
4	子どもの食べる機能の発達と食習慣の形成	○	○	○	○	用語記入用紙	3.4	3.3	3.2	3.2	3.5
5	1.炭水化物のはたらき 2.子ども味の形成に 関係する食環境の重要性	○	○	○	○	ビデオ「味覚のしつけは乳幼児期から」を見る。	3.5	3.3	3.3	3.2	3.5
6	1.脂質およびたんぱく質の働き 2.献立の工夫	○	○	○	○	ビデオ「健康な身体を作る子どもの食」を見る。	3.5	3.4	3.3	3.3	3.5
7	食事のパランスを整える方法	○	○	○	○	食事パランスガイドを用いた「毎日の食生活チェックブック」に自分の食事を記入し、評価する。	3.5	3.3	3.3	3.2	3.5

表2 やる気を高めた内容, やる気が低下した内容 (自由記述)

やる気を高めた内容		やる気が低下した内容	
内容	自由記述	内容	自由記述
(出現頻度) 離乳食 (17)	離乳食作りについて初めて学んだことが興味深かった。 離乳食の作り方のビデオを見た。 離乳の必要性 乳児の食のメニュー 乳幼児の食事のビデオ 離乳食～幼児食の料理についてのビデオ	(出現頻度) ビデオ (5)	ビデオの用語が難しかった。 ビデオを見ている時、部屋が暗くなるので、眠くなる。 ビデオの感想を書く時 (特に赤ちゃんの食べる時の口の動きを見た時)
お弁当料理 カード (17)	お弁当料理カードをあてはめた授業 お弁当のおかず選びをした授業 お弁当料理カード他人の作った献立を見る。 お弁当作りの考え方	自身の食事 記録分析 (5)	自分の食生活を考えた時、自分の1日の食事のバランスの悪さに気づいた時。 昨日食べた物を思い出して書く。 食事バランスの悪さ、ダイエツトが与える影響について知り、軽く考えすぎたことに気がついた。 毎日バランスを考えながら食事を取らないといけないとわかった時
食事バラン スガイド (14)	コマを実際に色を塗ることで、自分の栄養が整うとコマが回る喜びを感じ、毎回の食事を回ることを想像するようになっ た。 食事バランスガイドなど自分に直接つながってこくる授業 皆でお互いのサービングサイズを検討した時 自分のサービングサイズを調べ、バランスのとれた食事の重要性を教わる授業 自分の食生活をもう一度見直すきっかけになった。 自分の食事バランスを分かりそれに合わせた食事が学べた。	食事バラン スガイド 栄養学 (2)	バランスガイドの授業が続くと飽きた。 サービングサイズがわかりにくい。 栄養素、栄養生理・代謝に関する基礎的知識 栄養素のこと。
自身の食事 記録分析 (13)	自分の食生活を見直すための学習 自分や子どもがどのような食事をするのが望ましいのか知った時 ダイエツトについて、夏の食生活、カロリー消費の話 毎日、前日の食事を振り返った時 昨日は何を食べたか書きだしてみるという授業で、友達と確認しあった時	お弁当料理 カード (2)	お弁当の内容 お弁当を選んだこと
ビデオ (12)	ビデオで子どもが食事などとしていて、その姿がわかった。 子どもに対する食事についての配慮、指導法 子どももの食事の時のビデオ 子ども年齢に応じた食事作り 「健康な身体をつくる」子どもビデオ マウスがだしを飲んでいる時、あの笑顔はとても興味深かった。	献立作成の レポート 授業の速度 (2)	レポートの献立作成 自分で食事を作って写真を取る撮影の難しさ 初めのころは進むのが早く、内容を理解できなかつた。 乳幼児の咀嚼機能の発達で進みが早かつた。

献立作成 (9)	1日の献立を考えることが楽しかった。 献立作成、調理の基本、献立のことや幼児の献立 献立のところはななんだか興味があった。 料理の味付け、薄味、だし汁など 様々な料理があることを知ることができた。 日本型食生活	成長曲線の 演習 (2)	成長曲線はどう書くか難しい。
妊娠期の食 事 (7)	妊娠期(胎児期)の食生活妊娠している時の身体の変化や食生活 妊娠した時どうなるか、少し知れてこれからは役に立つと思った。 胎児の成長	用語調べ (1)	食事の用語を調べた時 子どもがひとりですごい食事を作ったり、ハンパバーガー等ばかり食 べている現状を知った時
乳汁栄養 (4)	母乳の大切さがわかった。 ミルクの作り方、扱い方法などを学んだ時	妊娠期の食 生活 (1)	妊娠時の障害を知った時
児童福祉施 設と小学校 の給食 (2)	いろいろな地方の給食を見た時	食育プログ ラム (1)	食育の内容を考えるのが難しかった。 体験型食育プログラムを考えるのが難しかった。
食育プログ ラム (2)	食育プログラムの作成	その他 (1)	4年なので隣の人と作業をするのに困った。
栄養学 (1)	食物の栄養素を学んだ。		
一汁三菜 (1)	乳幼児の食を見た時 以前から行っていた4つのお皿(一汁三菜)が必要なことを再確認 した時		
その他 (10)	食に関して話し合う時はやはり楽しかった。 保育者もつと食育に対して力をつけないといけないと感じた。 保育者として子どもの見本となるような食べ方を意識しようと 思った。 保育者になる身として、親になる身として考えさせられた。 ほとんどの内容で食に対する意識が高められた。 食生活について考えるようになった。 食と保育が関連するところが多かった。		

表中の記載は、学生による記載文であるが、長文の記述は抜粋し表記した。

の平均値間に有意な差が認められた。

「理解」は、授業回別では第1回が3.5点と最も高く、次いで第8, 9, 12回が3.4点であった。第3, 4, 14回は最も低く、3.2点であった。14回の授業回の平均値間に有意な差が認められた。

「発見」は、授業回別では第1, 8, 9, 10回が3.4点と最も高かった。一方、第4, 5, 7回では3.2点と低く、第13回では3.1点とさらに低下し、第14回では2.9点と最も低かった。14回の授業回の平均値間に有意な差が認められた。

「満足」について授業回別では第1回が3.7点と最も高く、次いで第9, 10, 11, 12, 13回が3.6点であった。低い得点では第2~8回、第14回が3.5点と高得点との差は0.2ポイントと少なかった。14回の授業回の平均値間に差はみられなかった。

以上のように、授業回による得点の違いがみられる項目は、「参加」「楽しさ」「理解」「発見」であった。

2. やる気を高めた内容、やる気が低下した内容

「やる気を高めた内容がありましたか」という設問に対し、「あった」「少しあった」と答えた人は全体の84.3%であった。

やる気を高めた内容、やる気が低下した内容を表2に示す。

「やる気を高めた内容」の自由記述で多い内容は、「離乳食」と「お弁当料理カード」であり、それぞれ17件であった。「離乳食」は、作り方・与え方に関するビデオや、教科書の写真ページにある離乳食の食事などを観た時の感想が多かった。「お弁当料理カード」は、おかず選びから栄養素バランスの良い食べ方に関する感想があり、次いで多かったのは「食事バランスガイド⁵⁾」であり、14件記載されていた。

また、前日の食事内容を学生同士が評価し合うなど、「自身の食事記録分析」は13件記載されていた。「ビデオ」では子どもの食事や食事場面が多いことから12件の記載があった。

「その他」には、「食に関して話し合う時は楽し

かった。」と、食に興味を示す記載もみられた。保育士養成の学びとして、「保育士として子どもの見本となるような食べ方を意識しようと思った。」「保育士として、親（保護者）として考えさせられた。」「保育士が食にどうかかわるかを考える機会になったことで、やる気が高まった」と、保育士として食を学ぶ意識が垣間見られた。

一方、「やる気が低下した内容はありませんか」という設問に対し、「あった」「少しあった」と答えた者は全体の20.0%であった。

やる気が低下した内容は、「ビデオ」の教材と「自身の食事記録分析」が5件であった。「ビデオ」では、「部屋が暗く眠くなる」という物理的な授業環境に関する記述であった。「自身の食事記録分析」では、「自分の食事内容の栄養バランスの悪さや、ダイエットが与える影響を知り、軽く考えすぎていたことに気がついた」などが記述されていた。

記述数は少ないが、「栄養学」「成長曲線」など基礎領域の項目が記載されていた。また、学生の理解度を確認しながら授業を進行すべき「授業の速度」は、「進むのが速く、内容を理解できなかった」という記載もみられた。その他には4年履修者による「隣のひとと作業するのに困った」ことが1件記されていた。

3. 授業評価の得点から見た学生の学習特性について

学生の学習特性を把握するため、授業振返りシートの項目のうち、「楽しさ」「理解」「参加」「発見」の得点を用いて主成分分析を行った。その結果3成分が抽出できた。

表3に授業振返りシートの評価の主成分分析結果および3成分の主成分負荷量と固有値を示した。寄与率は、各主成分における変数からの情報の程度を示す⁶⁾ことから、第一主成分、第二主成分の値をみると、第一主成分の固有値は2.344、寄与率は58.6%、第二主成分は固有値0.686、寄与率17.2%第二主成分までの累積寄与率は75.8%を

表3 授業振り返りシートによる評価の主成分分析結果および3成分の主成分負荷量と固有値

	第1成分		第2成分		第3成分	
授業評価項目	楽しさ	0.814	発見	0.710	参加	0.343
	理解	0.789	理解	-0.044	発見	0.175
	参加	0.774	楽しさ	-0.187	楽しさ	0.107
	発見	0.679	参加	-0.381	理解	-0.598
固有値	2.344		0.686		0.518	
寄与率	58.6%		17.2%		12.9%	
累積寄与率	58.6%		75.8%		88.7%	

示した。

第一主成分は「楽しさ」「理解」「参加」の主成分負荷量が高く示された。学びのプロセス⁷⁾は、(1) ひきつける(関心を喚起する段階)、(2) インパクトのある体験や情報の提供、(3) 体験や情報の振り返りと共有、(4) 応用をする、(5) プログラム全体の振り返りと評価を(1)から(5)へと順序立てて行い、(2)ないし(4)の段階へ継続的に働きかけができれば、さらに学びへの定着がある。

第一主成分の「楽しさ」「理解」「参加」について、保育士として子どもの食べる機能、食事内容や文化など食にかかわることを学ぶ初期段階として(1)の関心を喚起する段階と考え、第一主成分を「関心喚起の度合い」(授業に引き込まれて参加している状態)とした。

第二主成分の主成分負荷量は「発見」が正の値を示した。授業振り返りシートの「発見」の自由記述では、「牛乳を飲むことは大切とは前から習っていたが、なぜ必要かがわかった」など、日常生活に見られる現象の根拠を教員が指摘したことの記載であった。このように教授内容を主体的に身近な例と照らし合わせ、発見を積み重ねてゆくことがみられたことから、第二主成分は「主体的な

発見」とした。

図1は、X軸を第一主成分の「関心喚起の度合い」、Y軸を第二主成分の「主体的な発見」とし、主成分得点による学生の学習特性を示した。学生の学習特性と図中の事象との関係は、次のようになった。

第一象限は関心が喚起され、かつ主体的に何らかの発見をしている学生の事象である。第二象限は、関心喚起の度合いが低いが、何らかの発見をしている学生の事象である。第三象限は、授業に関心も喚起されず、発見もない学生の事象である。第四象限は、関心喚起の度合いは高く、授業に引き込まれて参加しているが、「発見の度合いが低い」学生の事象である。

各学生の主成分得点をプロットし、類似傾向別にA・B・Cグループに分けると、以下の学習特性が示された。

Aグループ：第一主成分(関心喚起の度合い)は正の値が多く、第二主成分(主体的発見)には正・負の値が存在した。このグループの学生は、授業に関心を持って参加し、授業回により主体的な発見にムラがあった。

Bグループ：第一主成分(関心喚起の度合い)は負の値を示し、第二主成分(主体的発見)は正

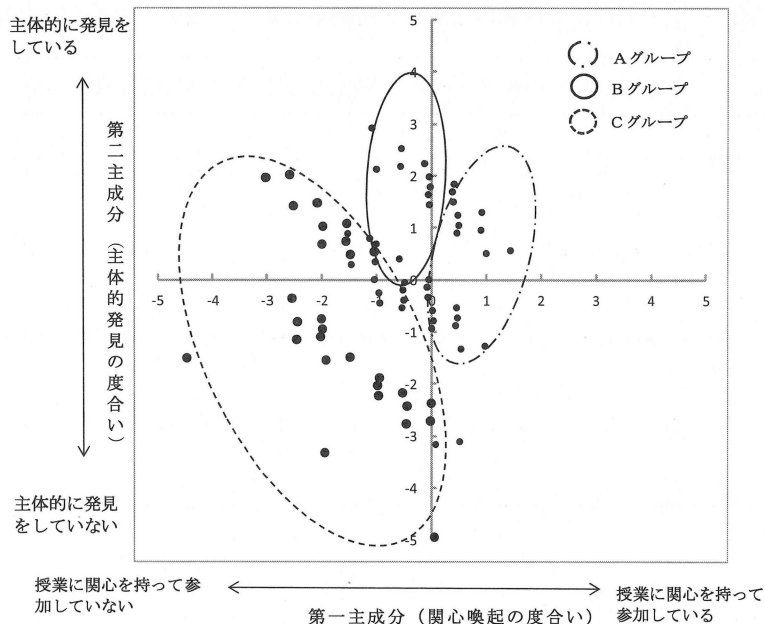


図1 主成分得点による学生の学習特性

図中の枠線は学生の学習特性の類似傾向について示したものである。

の値であった。従って授業に関心を持って参加する度合いが低い半面、主体的に発見をしていた。

Cグループ：第一主成分（関心喚起の度合い）は負の値を示し、第二主成分（主体的発見）は正負の両方を示した。このグループの学生は、授業に関心を持って参加していないが、授業回によって主体的に発見をすることもあった。

IV. 考察

1. 授業評価の得点と関連因子

平成23年度に開講された「食と発達」において、毎回の授業評価を行い、授業回ごとの評価項目と得点について検討を行った。今回の授業評価は、講義、演習など複数の授業形態を複合した形式を区別せず、1回の授業の評価で実施したため、授業形態による関連因子の抽出はできなかった。授業回ごとの評価と、やる気の上がる・下がる内容を総合すると、授業の妥当性と科目の目標を達成するための課題が次のように考察され、学生の授

業の受け方の傾向が次のように推察できる。

第1回の携帯情報ツール利用の演習は、「参加」「満足」の得点が高く、「理解」が14回中最高得点となった。これは、演習時に携帯電話やスマートフォンでWeb検索して得た情報について、教科書に示される内容と比較関連して考える演習内容のため、検索行動の興味に伴い、演習課題をより身近に感じることができ、授業内容の理解へつながったものと推察される。

グループワークは、「楽しさ」の得点が高くなる傾向がみられ、Web検索に表記された課題に関連する難しい内容を友人同士でディスカッションし、まとめること（第1回）や、友人の食事記録の内容をチェックする（第2回）など、お互いの意見を聞き、教え合い、まとめるコミュニケーション・プロセスが「楽しさ」の得点に反映される可能性が高いと考えられる。

「子ども」をイメージできる授業内容は、評価項目の全てが高得点となった。

「子ども」をイメージさせる働きかけは、学生の関心を引く効果が高い。例えば、教科書に掲載された幼児の食事写真では、子どもの姿がみられなくとも、解説は子どもに関するため、興味の度合いが大きくなる（第11回）。そのため、学生の受け取り方は、生活体験からイメージできる幼児食の得点は下がらなかった。身体機能や消化・吸収など（第3回）はイメージしにくく、学生の関心は低く、「理解」の得点では3.2と最低値を示し、理解するにはほど遠いと推察される。

栄養素や身体機能は、「参加」「楽しさ」「理解」「発見」の得点が低い。第3～6回では栄養素や身体機能が中心の内容であり、教科書に沿った授業の評価点は総じて低くなった。栄養素や身体機能の基礎知識の修得は、保育士の業務上の問題解決時に欠かせない内容であり、保育士養成課程教育要領の「子どもの食と栄養」の目標にも挙げられる内容である。「参加」「楽しさ」「理解」「発見」の得点の低さは、教科書による講義と演習の組み合わせや教材に興味、関心が高まらず、保育士養成課程の学生には保育の学びの中で栄養の位置づけが低く、受け入れ難いものと考えられる。栄養に関する専門用語の理解に抵抗感があるのではないかと推察する。

「食事バランスガイド」(第7回)、「用語調べ」(第1回、3回)、「食育指導計画作成」(第14回)の演習は、学生自身の受け止め方が異なり、やる気高める者と低下する者が存在した。やる気が低下する学生にとって、演習は負担感が強く、さらにやる気が低下し、授業の理解も低下すると推察される。一般的に演習は理解を深める方法として設定されるが、学生の学習に取り組むプロセスの到達段階を把握しきれない場合では、理解を深める事が困難になることも考えられる。

離乳食や幼児食の食事や料理の学習（第10回～12回）は、乳汁（第9回）より「発見」の得点が低い。離乳食では種類と形状の理解が求められるが、多種類の食品を調理してさまざまな料理にす

るという複雑で多様な要素を含む食事レベルの話は、単品の食品である乳汁よりイメージしにくいものも多く、「理解」「発見」が低くなる傾向がみられた。これは学生自身の食体験が少なく、望ましい食生活に程遠い日常の食生活²⁾との関係性が推察された。

「満足」の得点は、「理解」できていなかった授業でも高い評価を付ける傾向があり、第1回から第14回の授業の「満足」の評価点に差がみられなかった。「満足」は「理解」の評価を直接示すのではなく、演習の形式自体で「楽しさ」や「参加」の得点が高いなどの満足によるものと考えられる。授業を展開する上で本来期待される「学習内容を発見し理解した達成感による満足」は、直接反映されておらず、「興味がないのでこの程度でよい」という意識が「満足」の得点として反映された可能性も推察できる。

授業は学生の学習特性に対応させなければ効果は期待できないため、授業の妥当性を、簡便に評価する方法も検討が必要である。学生の授業に取り組む学習プロセスの到達段階を適切に把握し、主体的な発見から理解を高める授業改善に活用する評価法について、「満足」の評価項目を使用する際は、何に満足しているか、複数の評価項目と共に用いる必要性が明らかになった。

2. 「食と発達」を受講する学生の学習特性

「食と発達」の振り返りシートの評価得点の主成分分析から、学生がA・B・Cの3つの学習特性別グループに分けられた。

Aグループは授業に関心を持って参加しているが、主体的に発見をする場合としない場合がある。Bグループは授業へ関心を持って参加していないが、頻繁に主体的発見をしている。Cグループは授業に関心を持って参加していないが、主体的に発見をする場合がある。

授業への関心喚起のために今回のシラバスを構築したが、Bグループに見られる様な授業に関心のない者でも主体的な発見をしている者が確認さ

れ、学びのプロセスの段階を踏んでいると考えられないため、授業の妥当性は低かったと言わざるをえない。また、「発見」が必ずしも授業の目標の理解につながるかは、学生の自由記述から詳細に確認できなかった。

学生が授業に興味関心を持ち、関心を喚起させる授業計画の作成時には、学びのプロセスを意識した内容を検討することが求められる。すなわち、講義や演習など授業形態の組み合わせや教材の検討を、学習特性に合わせることが示唆された。

さらに授業中では、学生の学びのプロセスの状況把握を効果的に進めることが求められる。

授業振り返りシートでの評価項目は、4つの「参加」「楽しさ」「理解」「発見」を用い授業回ごとに確認すると、その授業の妥当性が把握できると考える。一方、「満足」の評価項目は、授業の学びのプロセスの段階を把握するには問題が残りに、今後さらに検討が必要と考察する。

V. まとめ

「食と発達」の授業における教育目標を達成するために、「授業振り返りシート」により学習テーマと教材の妥当性、学生の学習特性の把握を行い、以下の結果を得た。

1. 「子どもを取り巻く食生活の現状」の学習テーマは、「参加」「楽しさ」「理解」「発見」の得点が高く、栄養や身体機能の基礎知識では、「理解」「発見」が低かった。

2. 教材では、「お弁当料理カード」は、「参加」「楽しさ」が高く、写真などの静止画像によるスライドでは、「参加」「楽しさ」「発見」が低くなった。

3. 学生の学習特性は、関心喚起の度合いと主体的な発見を軸に3つのグループに分けられた。

以上のことから、講義や演習など授業形態の組み合わせや教材は、学生の学習特性に合わせることが課題となった。

授業評価項目は、「参加」「楽しさ」「理解」「発

見」の4つにより授業回ごとに確認することで学習プロセスを把握できるが、「満足」は、授業の学びのプロセスを把握するには問題点が残りに、評価項目の検討が必要であることが示された。

引用文献

- 1) 保育士養成課程検討会, 2010, 「保育士養成課程等の改正について」, <http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/images/kiyo50-15.pdf>, (アクセス日平成23年9月19日)
- 2) 高橋美保・川田容子: 保育者の食の認識からみる食育推進の課題～保育士養成課程におけるカリキュラムを通して～, 白鴎大学教育学部論集, 4 (2) 351-370. 2010
- 3) 入江慶太: 保育士養成校学生の食にかかわる意識調査—保育者との比較を通して—, 川崎医療短期大学紀要, 28号, 71-75. 2008
- 4) 三輪聖子: 岐阜県における幼児の食育調査と食育推進活動の実践例, 岐阜女子大学紀要, 36 (3) 105-114.2007
- 5) 「食事バランスガイド」で実践 毎日の食生活チェック, http://www.maff.go.jp/j/balance_guide/b_about/pdf/check_book.pdf, (アクセス日: 平成23年9月15日)
- 6) 赤池広次 (監修): 『パソコンによるデータ解析』, 朝倉書店, 東京, pp.62-76, 1988
- 7) 吉田新一郎: 『効果10倍の〈教える〉技術』, PHP研究所, 東京, p87, 2007